

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

Una vacanza sabbatica ⑩

* カノッサ城の静かなるカリスマ *

緋月 まや

「あなたはピッツァ派ですか？それともパスタ派ですか？」。この命題は、今や世界中で国民的な議論の盛り上がりを見せるだろう。それほどに、「イタリア料理」は世界の食卓に浸透している。そんな、みんな大好き「イタリア料理」が昨年十二月、ユネスコの世界無形文化遺産に登録された。「イタリア料理」といえば、美食の都、エミリア・ロマーニャ州の郷土料理を抜きにして語ることはできない。私たち日本人がかつて「ミートソース・スパゲティー」と呼び、現在では「ボロネーゼ」に置換されつつあるパスタは、エミリア・ロマーニャ州の州都ボローニャを発祥の地とし、その上にふりかける「パルメザン・チーズ」は、同州名産のパルミジャーノ・レッジャーノを原点とする。「イタリア料理」のおつまみの代表格、生ハムといえば、同州パルマ県産が王者であろう。そして、これらの食事に欠かせない、この美食の都が誇る特産ワインこそ、近年は日本でもよく見かけられるようになった微発泡ワイン「ランブルスコ」である。世界的にも珍しい、鮮やかな緋色の発泡酒だ。ランブルスコには、エミリア・ロマーニャ州の中でもどの地域で栽培された葡萄でつくられているかによって、さまざまな種類がある。私が最も惹かれるのは、モデナ県のソルバラ産だ。その緋色の泡には、中世ヨーロッパを揺るがした大事件「カノッサの屈辱」にまつわる類まれな女性の物語が秘められている。「カノッサの屈辱」は、その名が表す通り、屈辱を浴びた人間と与えた人間のエピソードとして語り伝えられることが多い。しかし、この舞台の裏側では、中

世という絶対的男性優位社会において、寛容の精神を尊び、リーダーとして人心を掌握したひとりの女性が調停役を果たしていたのである。

*



【モデナの大聖堂】

モデナ駅から十分も歩けば、大聖堂の尖塔が見えてきた。美食の都の台所「アルビネッリ市場」は、そのすぐ側にある。黒い鉄格子の門をくぐって、どことなくレトロな建物の中に入った。天井に張り巡らされた鉄骨の、アール・ヌーヴォー調の曲線がそう思わせるのかもしれない。建物の中央には、果物かごを抱えた少女の彫像を取り囲んで、噴水が設置されている。この建物が完成した1931年当時には、清潔な水は貴重で、買い物客が買った野菜や果物を洗えるよう考案されたという。トマトソースは「イタリア料理」の要、野菜屋さんには山積みになったトマトの赤が眩しい。モデナ

特産のバルサミコ酢には専門店があって、どれを買ったらいいのか迷う。サラミ屋さんの天井からは、太腿一本の生ハムが列を成してぶら下がっている。「チャオ、ベッラ、食べてみて」と、店のご主人が試食用のスライスを指さした。「チャオ、ベッラ」は「やあ、別嬪さん」の意であるが、実用会話としては、相手が美人であってそうでなくても使われる。



【アルビネッリ市場】

本場の生ハムの旨味を噛みしめながら、エノテカのテーブルに腰を落ち着けた。さすがは地元、ワインメニューの筆頭はランブルスコで、種類が選べる。もちろん、ソルバラをお願いした。その緋色の泡の輝きは、これまでに出会ったどのランブルスコよりも淡く透明だった。舌の上に乗せてみるときりとした辛口で、決して葡萄の甘みやタンニンのパワーを主張するワインではない。その伶俐な口当たりは、千年もの昔に、女性でありながら、このランブルスコの地を統率した大領主マティルデ・ディ・カノッサの静かなカリスマ性を思い起こさせた。古代ローマ帝国で、当初迫害されていたキリスト教が皇帝によって公認され、国教となったのは四世紀のこと。皇帝に庇護される形で萌芽したカトリック教会の支配力は増大し、皇帝の地位を脅かすようになった。ヨーロッパでは何百年にも渡り、世俗の最高統治者である皇帝と宗教界の最高指導者である教皇の激しい権力闘争が続くことになる。マティルデ・ディ・カノッサ——彼女こ

そ、教皇が皇帝を公衆の面前で跪かせ、教皇の優位を世間に知らしめた歴史的転換点「カノッサの屈辱」の立役者である。

マティルデ・ディ・カノッサは 1046 年、エミリア・ロマーニャ並びにトスカーナ辺境の広大な領土を支配する大貴族カノッサ家の娘として生まれた。カノッサ家が本拠地としていたのが、アペニン山脈に広がる要衝地カノッサである。兄がいたが、若くして亡くなったため、三十歳でその家督を継いだ。当時、神聖ローマ帝国(現ドイツの母体)皇帝のハインリヒ4世と教皇グレゴリウス7世とは、司教や修道院長ら聖職者の任命権をめくり争っていた。いわゆる叙任権闘争である。帝国統治に関わる要職の人選は皇帝側の既得権であり、教皇側はこの叙任権を宗教界の専権事項にしたかった。教皇は、皇帝を破門する強硬手段に出た。国教の信徒であることを禁じられた皇帝に、臣下は服従の義務を負わなくなる。それでは統治が立ち行かない。1077年、皇帝は、教皇が滞在していたカノッサ城を訪れ、その門前で、雪の中を裸足になって三日三晩、赦しを請い続けた。この信じ難い屈辱から、不本意な謝罪や服従を示す慣用句として「カノッサへ行く(Andare a Canossa)」という表現が生まれたほどだ。皇帝ハインリヒ4世はマティルデの又従兄であるという血縁関係があったにもかかわらず、叙任権闘争において、敬虔なキリスト教徒である彼女は一貫して教皇の支持者であった。要塞であるカノッサ城に教皇を招き、その身の安全を保証することで、彼女は教皇に和解のチャンスを与えたのである。皇帝が味わった屈辱と引き換えに、結局、教皇は皇帝の破門を解いた。これは、信仰心を貫こうとするマティルダの進言があったからだともされる。悔い改めたものを赦すことは、キリスト教において最高の徳とされるからだ。もちろん、そこには政治的バランス感覚も働いたに違いない。もしも赦しを与えなければ、皇帝臣下は教皇の不寛容を責めるだろう。教皇を支持した自分に報復の手が向けられるかもしれない。

グラスの中できらめくランブルスコの緋色を見つめながら、私は、寛容という美德を統治の中核に据えようとするマティルダの信念と、冷静な判断力に喝采を送る。彼女のリーダーたる資質は、それだけではない。叙任権闘争は「カノッサの屈辱」では終結せず、その後再び、皇帝ハインリヒ4世は教皇に反旗を翻すようになる。マティルデは教皇と自陣を守るため、自らが司令塔となり、戦闘に挑んだ。今ではランブルスコの銘醸地として名を馳せるソルバラを舞台に、皇帝軍を一夜で撃破した「ソルバラの戦い」は、彼女の軍事的手腕と共に人間関係の構築力が発揮された戦いだ。マティルデは教皇派の軍勢をまとめ、近隣軍との緊密な連携で奇襲攻撃を仕掛け、皇帝軍を挟み撃ちにしたのである。その後の戦いでも、彼女は地の利と人の和を尊んだ。アペニン山脈の難攻の地形を知り尽くして実践に生かしながら、地元の貴族や騎士をことごとく自分の味方につけ、その連携で勝利を収めていった。みんながマティルデに味方したのは、性別を超えた指導者として彼女に信頼を寄せていたからであろうが、とりわけ彼女のその寛容の精神、つまり、人の話に耳を傾け、その人の立場になって思いを馳せる想像力、その人柄に惹かれていたからではなかったかと、私は想像する。前近代、支配階級の女性はその地位を維持するために出産を大きな武器とするのが常であった。子供は、主君である夫の寵愛をつなぎとめるための生命線であり、夫に捧げる政略結婚の駒であった。「母」にならなければ、一族の役立たずとそしりを受けた。マティルデは二度の政略結婚を経験しているが、死別と破局に終わり、子宝には恵まれなかった。けれど、彼女は、そのことすら彼女の弱点にはさせなかった。「母」ではなく、神の信者として教皇に忠誠を誓う従順な「娘」という立場を前面に押し出し、男性に敵対するイメージを退け、千年もの昔に、その人望で女性による統治を社会に受け入れさせた歴史的カリスマなのである。

ランブルスコには、「マティルデ・ディ・カノッサ」という彼女の名前を冠したコンテストがある。地元の商工会議所がワイン関係団体と協力して行っているもので、彼女は今もランブルスコの地のアイコンとして生き続けているのだ。そんなマティル

デは、いくつかのランブルスコ伝説を持つ。「ソルバラの戦い」の前夜、マティルデはランブルスコの入った樽を敵陣に送り込み、敵兵を酔わせ、それが勝利をもたらしたとする物語もあれば、反対に、自陣の兵にランブルスコを振る舞い、士気を高めたとするものもある。前者を史実と捉えるのは難しいが、後者は実際にあったとしても不思議な気がしない。マティルデの時代には、現在のランブルスコのような微発泡ワインを醸造する技術はなかったから、それは泡のないランブルスコだったかもしれないし、自然発泡したものだったかもしれない。そんな昔のランブルスコをカノッサ城に兵士を集めて振舞っている姿は、私の中のマティルデというリーダー像に、いかにも合致するのである。

*

マティルデから千年の時を経てなお、女性が一国のリーダーとなることは容易ではない。そんな中、偶然にも、イタリアではメローニ首相、日本では高市首相という両国初の女性首相が誕生し、意気投合した様子を見せている。ランブルスコがくれる心地よいほろ酔いの中、お二人にはぜひ、寛容の心を持って国家の舵を切っていただきたいと願ってやまない。

(ライター、イタリアソムリエ協会/AIS 認定ソムリエ)



ペリフェリア(郊外)の憂鬱 ②

* スカンピアの独立系出版社 *

二宮 大輔

郊外を取材すると決めて真っ先に向かったのがスカンピアだった。ナポリの郊外地区で、実はすでに記事として取り上げたことがある(2020年5月号)。そのときとやや重複するが、改めてスカンピアを紹介したい。ナポリ市北部に位置し、一時期はヨーロッパ随一の麻薬市場と言われていた郊外住宅地だ。その中心にあったのが、1970年代につくられた「帆」の複数形を意味する巨大集合住宅群ヴェーレ。7棟で構成されたヴェーレは治安悪化の一途をたどり、2000年代まで犯罪組織カモッラの抗争が繰り返されたいわばナポリの暗部だ。

私がこの地を知ったきっかけは『ゴモッラ』である。もともとは2006年にジャーナリストのロベルト・サヴィアーノが書いたノンフィクションで、カモッラの実態を暴いたセンセーショナルな内容で、国内だけで200万部以上を売り上げるベストセラーとなった。それを原作にして2008年に映画化され、カンヌ国際映画祭で審査員特別グランプリを獲得。さらに2014年、ロベルト・サヴィアーノも脚本に加わりカモッラ・ファミリーの一大抗争史に落とし込んだドラマがスタートする。私は小説も映画も大好きなのだが、特にこのドラマに心を奪われた。入り組んだ人間関係と裏切りと復讐を繰り返すストーリー展開がなんとも癖になるのだ。ただ「ドラマ推し」は何も私に限ったことではないようで、イタリア全土で高視聴率を記録したドラマ版『ゴモッラ』は、なんとシーズン5まで制作されて2021年にようやく完結を見た。と思っていたら、今年1月にシーズン0にあたる『ゴモッラ その起源』(Gomorra le origini)が放送されたばかりだ。さすがに引っ張り過ぎな気がしないでもないが、とにかくこの一連の作品の舞台となったのがヴェーレだ。

ただ、ドラマ『ゴモッラ』はあくまでフィクションであり、その世界的な大ヒットがスカンピアのイメージ悪化を助長したという意見も多い。地元民たちはスカンピアの住環境を改善しようと、90年代からすでに行政とともに再開発の計画に取り組んで

きた。それが実を結び、2020年にヴェーレの解体工事も始まり、さらに2022年には歴史ある名門フェデリコ2世ナポリ大学の新校舎が完成した。ニュースで見聞きする限り、スカンピアのジェントリフィケーションは着実に進んでいるようだ。そこで実際の様子を見てみたいと、2025年5月にスカンピアを訪問した。



【ラ・スクニッツェリアの入口】

国鉄ナポリ駅の前ガリバルディ広場からバスに乗って約30分くらいだろうか、スカンピアに到着した。ついに憧れの地に来たという興奮と、そうはいってもカモッラが蔓延るイメージからくる恐怖が混在する不思議な感覚でバスから降りた。おっかなびっくりまず向かったのは、ヴェーレではなくラ・スクニッツェリア(La Scugnizzeria)という書店だ。スクニッツォ(scugnizzo)はナポリ方言で「いたずらっ子」といった意味で、その語尾に-eriaをつけることで「店」の意味に変化させた造語だ。いわば「いたずらっ子のお店」といったところか。

その存在は数年前にすでに知っていた。ラ・スクニッツェリアを運営する出版社マロッタ・エ・カフィエロ(Marotta & Cafiero)がローマの中小出版社見本市で出店しており、そのときに偶然見知って本も購入していたのだ。『ゴモッラ』に心酔して

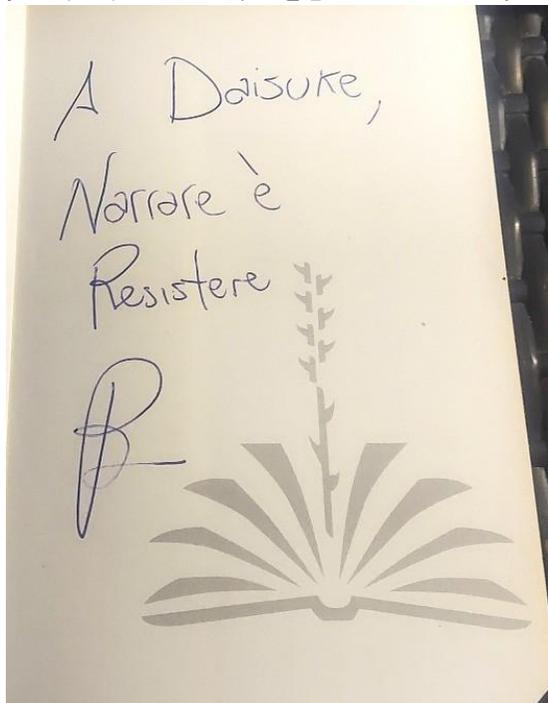
いた私は、スカンピアに興味を持っており、その地に拠点を置く出版社と聞いてすぐさま食いついたのだった。そのときに購入したのは『リュウゼツランの花々』(Fiori d'agave)というスカンピアを舞台にした短篇集。見本市のブースにいた著者ロザリオ・エスポージト・ラ・ロッサは、なんとマロッタ・エ・カフィエロの社長でもあるらしい。彼から直接本を購入すると、気前よくサインまでしてくれた。

そのときは「別にサインなんていらぬのに…」と思っていたが、その後、本を読んで彼の壮絶な人生に驚かされた。『リュウゼツランの花々』の最終話「アントニオ・ランディエーリ・スタジアム」によると、2003年、彼が15歳のときにスカンピアでカモツラの抗争が勃発する。もともと身体障害のあった従兄アントニオ・ランディエーリは、一般市民でありながら、カモツラの抗争に巻き込まれて殺されてしまう。カモツラの若手構成員らが、コカインを摂取した状態で、麻薬流通グループと思い込んでアントニオと他5人の友人に向けて発砲したのだ。身体障害があったアントニオは逃げ遅れて命を落とした。ただ事件はそこでは終わらない。なんと翌日の新聞にアントニオが「麻薬流通グループのボス」と書かれてしまい、その誤認から、正式な葬儀や埋葬も不可能になってしまったのだ。アントニオの無実を晴らし、名誉を回復させるため、ロザリオ・エスポージト・ラ・ロッサは講演会などで各地に飛び回り、ナポリ市に働きかけた。ついに犯人は全員逮捕、アントニオの名前が地元サッカー場に使用されることが決まった。そのサッカー場こそが短編のタイトルでもある「アントニオ・ランディエーリ・スタジアム」だ。

そして彼は、カモツラの象徴でもあるコカインを雪に喩えて『雪の向こう側』(Al di là della neve)という短篇集を書き上げ、出版するために何十社という出版社にメールを送る。唯一返事をくれたのが、ナポリ南部の海辺にある高級住宅地ポジツリポの出版社マロッタ・エ・カフィエロだった。『雪の向こう側』刊行後、マロッタ・エ・カフィエロのトンマーゾ・マロッタは、フランスで新たに出版社を立ち上げるから、ポジツリポの出版社を譲りたいとロザリオ・エスポージト・ラ・ロッサに持ち掛ける。こうして1970年代から続いていたマロッタ・エ・カフィエロは、「麻薬ではなく、本を売りさばく」をスローガンに掲げ、2017年にスカンピアで再出発することとなった。その編集、営業、販売、印刷が集約された場所がこれから向かうラ・スクニツェリアな

のだ。

私はカモツラが主人公の『ゴモツラ』も大好きなのだが、『リュウゼツランの花々』には思わず引き込まれてしまった。それほどエネルギーのある本だった。本を読んだうえで、「物語ることは抵抗すること」(Narrare è resistere)と書かれたサインを見返すと、なかなか深みを感じるではないか。



【著者のサイン入り『リュウゼツランの花々』】

こうしてやってきたのはスカンピアの中でもかなり古い集合住宅。郊外ではよく見るタイプのものだが、これは年季が入っている。その一階部分にあるのが、今回の取材先ラ・スクニツェリアだ。まず外の壁に設置された黄色いボードに目が行く。ボードに黒字で書かれた「つるされた本」(Libro sospeso)という言葉が示すとおり、いらなくなった本をつるして誰でも持ち帰れるようにするというシステムだ。さらにボードにはQRコードが描かれており、そこから無料で世界の名著にアクセスできるようになっている。いずれも地域の子供たちが気軽に本に触れられるようにするための配慮だ。

書店に入ると、もともとバールだったことがわかるカウンターがあり、その上にはチリの亡命詩人パブロ・ネルーダの言葉「花をすべて刈り取ったとしても、春が来るのは止められない」が掲げられている。細部まで気になるところが多いラ・スクニツェリアだが、この書店と編集部を兼ねたス

ペースだけでなく、隣の印刷所、手前のピッツァ店、そして2階の演劇スタジオもいっしょに運営しているようだ。現在従業員は14人、近くのショッピングモールには新たに書店がオープンしたばかりだ。スカンピアの地でゼロからここまで事業を拡大させたマロッタ・エ・カフィエロ社のロザリオ・エスポージト・ラ・ロッサに、私が気になって仕方がなかった質問をしてみた。



【入口の上にパブロ・ネルーダの言葉が】

——現在、スカンピアの環境は変わりましたか？
とても変わりました。麻薬の流通もなくなり、ヴェーレも解体されて残っているのは2棟だけ。いちばんひどかった2004年から20年以上が経ち、若い世代がイニシアチブを取り、大きな変化をもたらしました。

——カモツラを批判するような出版活動をしていて、命の危険を感じませんか？

まったく感じません。私たちの活動は誰かを断罪することはしません。答えは常に読者の考えに委ね、誰かに対して戦争をしかけるようなことはしません。常にさまざまな意見を受け入れる開かれたスタンスをとっています。

——個人的にはロベルト・サヴィアーノ『ゴモツラ』でスカンピアを知ったのですが、彼のことをどう思っていますか？

ロベルト・サヴィアーノは素晴らしいジャーナリストです。『ゴモツラ』は私にとっても人生の分岐点となった作品です。彼の告発は素晴らしかった。ただ、それに続く映画とドラマは嫌いです。スカンピアの肯定的な面を描こうとしないので。

——サヴィアーノとあなたたちでは、スカンピアへのアプローチの仕方が違いますね。

自分たちの企画した本は地域を守るための抵

抗運動という性格が強いです。実際ここに住んでいる人の視点を大事にしています。

折しも数日後にトリノで開催されるブックフェアに出店予定のマロッタ・エ・カフィエロは荷造りや郵送物の処理で大忙し。ここで取材を切り上げることにした。最後に隣接する印刷所を案内してもらった。小さいながら自前の印刷所を持つことで少数の対応も可能にしていると教えてくれた。若くして出版社を引き継いだものの、戦略的にも緻密に経営をしていることが垣間見えて、とても充実したラ・スクニツェリア訪問となった。

さて、取材は楽しかったが、私が求めていたイタリアの郊外像とは大きく異なる現実がそこにはあった。前回、ローマのコルヴィアーレは悪いイメージで語られすぎており、その本質を偏見のない目で観察するのは難しいという話があったが、今回のスカンピアも、正直なところ、カモツラの巢窟が目玉の当たりにできることに期待して気持ちが高揚していた部分もあった。現実はそのようなものではないのだ。『ゴモツラ』のイメージは、エスポージト・ラ・ロッサも否定していた。私は『ゴモツラ』の聖地巡礼にならないようにと気を引き締めて、もう一度バスに乗り、今度は2棟のみが残るヴェーレへと向かった。



【ラ・スクニツェリアの本棚】

(翻訳家、元当館語学受講生)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <https://italiakaikan.jp/>